

## 三世竹本越路太夫の芸と人

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森西, 真弓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4469">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4469</a>

# 三世竹本越路太夫の芸と人

森 西 真 弓

## はじめに

三世竹本越路太夫（一八六五〜一九二四）は、大正年間、御霊文楽座の紋下を務めた近代を代表する名人のひとりである。だが、同様に評価される竹本攝津大掾や豊竹山城少掾と違って、一冊にまとまった評伝や芸談は存在しない。

そんな中、平成七（一九九五）年、越路太夫旧蔵の床本、番付などの資料類と見台、レコードなどの遺品類、約五百点がご子孫から国立文楽劇場に寄贈された。その際、筆者は劇場から依頼を受けて、数名の研究者とともに資料・遺品類の整理のお手伝いをさせていただいた。

一連の作業を終えて、同年十一月四日から十二月十日まで、劇場一階の展示室で、国立文楽劇場企画展示「三世竹本越路太夫」と銘打つ遺品展が開かれた。期間中の十二月九日には小ホールで、列品

講座として「三世竹本越路太夫と大正時代の文楽界」があり、筆者が講師を務めた。翌年二月には寄贈品目録『三世竹本越路太夫』も刊行されている。

筆者は目録に解説「三世竹本越路太夫とその時代」を執筆した。主に履歴、芸歴を綴ったものだ。本稿は、その時に書ききれなかった越路太夫の芸と人に関する資料を今の段階でまとめるものである。

## （一）文学史の中の越路太夫―『暦』発見にまつわる逸話―

井原西鶴が浄瑠璃史に名前を残していることは夙に知られている。通説では、貞享元（一六八四）年、大阪道頓堀に竹本義太夫が竹本座を創設したのに対抗した宇治加賀掾が、翌年、京から大阪へ下って興行を打った。その際、西鶴に委嘱した新作が『暦』で、近松門左衛門作『賢女の手習并新暦』を上演した竹本座と張り合ったが、

軍配は竹本座に上がったとされている。西鶴、近松という大物が同時に登場し、劇的に語られてきた逸話だが、典拠となった『今昔操年代記』が後年の資料で、年次に誤記などがあることから、異説も存在する。かつて本学で専任講師を務めてくださった大橋正叔天理大学名誉教授は、さまざまな考証から否定的な意見を述べ、新説を提示しておられる。詳細は先生のご著書『近世演劇の享受と出版』（二〇一九年 八木書店）所収の「浄瑠璃史における貞享二年」に譲って、ここでは、西鶴作『暦』の丸本発見に、三世越路太夫が関わっていることを紹介する。

藤井紫影は昭和七（一九三二）年に貴重図書影本刊行会から出版された「西鶴の浄瑠璃『暦』解題」に次のように記している。（以下、引用文はすべて旧漢字、旧仮名を現行の漢字、仮名使いに改める）

何処かに丸本がありそうなものと、昼夜念がけていた処、先年朝日新聞社が近松二百年記念を発起し丸本の搜索蒐集東奔西走大いに努めた際、同社の内海幽水氏が故越路太夫の蔵架中よりゆくりなく暦の丸本を発見されたのは、実に意外の獲物で、近來の大発見と云わねばならぬ。

文学史上、浄瑠璃史上の「大発見」に三世越路太夫が貢献したわけだが、これに関する逸話が別の資料に残されている。それは、実際の発見者である内海幽水が記した「西鶴研究の資料について」で、

雑誌『苦楽』臨時増刊第三号（昭和二十四＝一九四九年五月）に掲載されている。

一部を引用する。

大正十一年に私が同博士の校訂による近松全集の出版をお手伝いした際、加賀掾の正本で近松の作と推定すべき数篇の院本が必要となり、百方手をつくして探索する最中、攝津大掾の遺品の中からそれらしいもの二三を発見したのにヒントをえて、文楽座の紋下太夫竹本越路の宅を訪い、所蔵の院本があれば拝見したいと申出たのである。その時越路太夫は宿痾療養のため淡路へ行っていたが、妻女は院本なら数多所持する旨を答えて土蔵の中の書架へ私を案内した。私は数百冊の院本が整然と積まれている書架から近松の稀観院本十数冊を探り出すと同時に、「暦」の正本をも発見したのである。全く予想外の收穫であった。発見の刹那に感じた喜悦の情を今に私は忘れることができない。それは鮮明に印刷された八行本、罫一、汚点一つない美しい本であった。藤井博士の近松全集の最終巻と黒木勘蔵氏編浄瑠璃名作集の上巻とに収録された「暦」は、こうした偶然の発見、全く、私の怪我の功名により活字に翻刻されて世にあらわれ、西鶴の研究に一生面を拓くようになったのである。

発見者である内海幽水の興奮ぶりがよく伝わる内容となっている。この資料を筆者はすでに展示会の段階で入手していて、目録の解説

文には入れられなかったのだが、先述の講座では紹介した。肥田睦三先生が『苦楽』を所蔵されていて、コピーをくださった。『苦楽』は戦前と戦後に二度刊行された、文学界に著名な雑誌である。

## (二) 文献の中の越路太夫

展示会からすでに二十五年、当時に比べると近年はデジタル化が進み、資料の探索や閲覧が容易になった。雑誌の目録と目次の一覧や書籍の再刊と索引の整備などで記事が調べやすくなったこともある。それらを活用して、三世越路太夫の芸と人柄について、さらに探っていくこととする。

因みに前回の解説文は四千字と字数が少なかつたため、参考資料を明記することなく、本文に落とし込んだり、ごく一部を引用するに止まった。まずは、前回、記録できなかった参考文献を挙げておく。

- 『義太夫年表 明治篇』（義太夫年表編纂会著 昭和三十一年 一九五六年 義太夫年表刊行会）
- 『義太夫年表 大正篇』（財団法人文楽協会著 昭和四十五年 一九七〇年「義太夫年表」（大正篇）刊行会）
- 『竹本攝津大掾』（水谷不倒著 明治三十七 一九〇四年 博文館）
- 『義太夫大鑑』（秋山清著 大正六 一九一七年 私家版）

- 『此君帖』（橋米吉著 大正十二 一九一三年 富久積舎）
- 『文楽今昔譚』（木谷逢吟著 昭和四 一九二九年『道頓堀』編集部）
- 『人形芝居雑話』（石割松太郎著 昭和五 一九三〇年 春陽堂）

- 『文楽の研究』（三宅周太郎著 昭和十五 一九四〇年 創元社）

- 『文楽史』（木谷逢吟著 昭和十八 一九四三年 全国書房）
- 『文楽聞書』（茶谷半次郎著 昭和二十一 一九四六年 全国書房）

- 『山城少掾聞書』（茶谷半次郎著 昭和二十四 一九四九年 和敬書店）

- 『芸談かたつむり』（竹本綱太夫著 昭和四十一 一九六六年 布井書房）

二冊の『義太夫年表』は近代文楽史を知る基本資料である。続く文楽関連図書からは越路太夫の経歴だけでなく、芸と人に関する記述を探した。他には雑誌『演芸画報』明治四十三 一九一三年六月号掲載の「名家真相録」を参照した。

## (三) その修業

ここからは、(二)に挙げた資料以外にも情報を追加していく。

杉山其日庵著の『浄瑠璃素人講釈』は、大正十五（一九二六）年十一月に黒白発行所から初版が出た。その後、昭和五十（一九七〇）年には正誤表を付した新版が鳳出版から再刊されている。さらに平成十六（二〇〇四）年に岩波文庫として上下二冊の形で刊行され、下巻に人名索引が付された。

杉山は越路大夫にその青年時代から注目していた（目次番号八八・九〇）。それは明治二十八（一八九五）年一月、文楽座で「祇園祭礼信仰記」三段目の口「鳶田の段」（上爛屋）を聴いた時の記憶で、越路大夫は当時さの大夫を名乗っており、三十歳だった。杉山は「次第に更くる夜嵐に」と語り出した時、……別な世界から、はるかに吹き送られて来た駒太夫風の声かと思うほど、音が据おんっていて、この世で聞けぬと思うていた声を聞いたので、驚いたのである」と記している。夜、訪ねて来た越路の師匠の攝津大掾に感想を伝えているところへ当の本人も現れ、挨拶した話も綴られている。この日以来、杉山は越路大夫が亡くなるまで「排他的絶対の蠱虺」となり、「大飯を食われた」という愉快なエピソードも伝えている。

ここでは、『浄瑠璃素人講釈』を元に、修業熱心だった様子を紹介していく。

目次番号六六に『碁太平記白石噺』『新吉原揚屋の段』の稽古に関する経験談が語られている。越路大夫が明治二十七（一八九四）年九月と推定される文楽座の公演で、病気休演した攝津大掾の代役で急遽勤めた時のことである。三味線を弾いていた五世豊澤廣助に稽古を頼んだが、稽古したところで充分に出来るはずがないと断ら

れてしまった。後日、このことを師匠に伝えると、攝津大掾から浄瑠璃の七段目という役場は『忠臣蔵』にしても『加賀見山』にしても、自分で思案しなければわからないものだと諭されたという。芸の深遠さを物語る逸話だ。

似たような話が目次番号二六にもある。『源平布引滝』『綿繰馬の段』について、明治三十九（一九〇六）年十一月、役がついたので稽古をしてもらおうと攝津大掾を訪ねたら、役がついてから来るようでは遅すぎる。今教えてすぐに語れるものではないから、今回はそのままやっておき、公演が終わったら稽古に来るように叱られたというのだ。結局、越路大夫は不安なまま舞台を勤めざるを得なかった。

明治三十九（一九〇六）年九月、文楽座で越路大夫は『三十三間堂棟由来』『平太郎住家の段』を語った。これを聴いた杉山は「餅のない汁粉を食うよう」に感じて、越路の慢心を注意している（目次番号三五）。

大正時代に移る。現役を引退してからも攝津大掾の弟子に対する厳格な指導は続いた。『花上野誓碑』『志度寺の段』で、源太左衛門の引込の表現を注意された越路大夫は、年齢も五十歳近くなり、白髪も出て来たので、何とか稽古が先に進むよう、杉山から師匠に頼んでほしいと訴えて来た。同情した杉山がそのことを伝えると攝津大掾は烈火の如く怒り出したという（目次番号一九）。他にも若い日、自分たち直弟子よりも素人義太夫や東京から来た三味線弾きが優遇されていることについて周囲に不平を漏らしたのが攝津大掾の

耳に入り、勘気を蒙ったエピソードも綴られている。いくつになっても弟子にとって師匠は怖い存在だったようだ。

こうした修業の後に越路太夫の芸は花開いていく。最後は認められ、誉められている記事を挙げる。

大正四（一九一五）年三月、もしくは六年四月に文楽座で『義経千本桜』『鮎屋の段』を語った時のことである（目次番号一八）。語りが筑前風になっていないことを杉山が指摘すると、越路太夫は礼を述べて帰り、翌年、東京歌舞伎座での素浄瑠璃の会で完璧に筑前風に語ったという。喜んだ杉山は羽織一枚と印籠を贈っている。

さらに、大正七（一九一八）年十月の文楽座における攝津大掾一周忌追善興行の『中将姫古跡松』『雪責の段』を絶賛している（目次番号一二）。いわく攝津大掾より優れているというのだ。杉山は「師匠臭くなくて綱太夫臭かったので、堪能するほど面白き珍しい語物を聴いて、大阪に来た甲斐があって有難うと御礼を云うぞ」と越路太夫に告げている。前後には「風」を重んじた杉山の持論が縷々述べられているので、興味のある方にはご一読いただきたい。

本文には会話体が多く使われており、読んでいると直接、杉山や攝津大掾、越路太夫の語りが聴こえてくるようだ。

杉山と攝津大掾、越路太夫との交流は書面を通しても行われている。国立文楽劇場に寄贈された遺品の中に、杉山から攝津大掾や越路太夫に宛てて送られた書簡が卷子本四巻の形で含まれていた（『目録』二卷子本・軸のうち「三世竹本越路太夫宛 杉山茂丸書簡」98〜101）。注意や感想、誉め言葉などが綴られており、たいへん貴

重なものだ。

その一部は国立劇場の上演資料集に翻刻紹介されている（四八一号 平成十七（二〇〇五）年九月『菅原伝授手習鑑』・四九八号 平成十九（二〇〇七）年二月『撰州合邦辻』）。杉山は「寺子屋」に関して越路太夫の質問に答え、助言や注意を与えている。また、「君の寺子屋天下己に定評あり 余りイジラヌが良いと思ひ候」「今夜の九ツユリは貴君の絶品と存候」といった誉め言葉もある。「合邦」には「俊徳の詞も婆耶の情合もつかんで放るよう語れ」と助言している。

これ以外にも筆者が先述の講演をした際のメモ書きに、「九段目」に対して「色がそれぞれに違わねば人形が動かぬ。人形のことを考えて語ればよい」、「鮎屋」には「金箔つき」、「紙治」に「生が一夜の幸福」といった文言が綴られていた。ぜひとも全編の翻刻をしていただきたい。

最後に別の資料から一つ挙げる。コラムの金字塔と称えられた薄田泣菫の「茶話」に次のようなひとこまが記録されている。

〔竹本〕越路太夫は文楽座の十一月興行に『忠臣蔵』の九つ目〔山科閑居の段〕を語っている（引用者注Ⅱ大正六年）。立派な出来で、この物語一つで初日以来座は毎日のように大入を続けている。

二三年前、同じ座で同じ九つ目を語った事があった。その折

越路は自分ながら物足りない点があったので早速師匠撰津大掾の許に駆けつけた。(略)

越路は大掾に向かって言った。これまで幾度か師匠の九つ目を聴いて、結構な出来だと思わぬことはなかったが、さて自分が語って見ると、戸無瀬も本蔵も初めからしゃちこぼって、まるで喧嘩を売りに来たようにしか見えない。

「どの工合だっしやる、ねっから工夫が付きまへんよって。」と言って、胡麻白の頭を几帳面に下げた。

大掾はそれを聞くと、

「ふむ、お前もやっぱりそうかいな。」

と言って感心したように首をふった。大掾の言葉によると、彼も長い間幾度かこの九つ目を語ったが、戸無瀬も本蔵もどうかすると喧嘩腰で、ぶっきらぼうになりがちなので、いつだったか、越路と同じような事を言って、師匠の春太夫に訊いた事があった。春太夫は弟子の顔を見て唯にやにや笑ってのめいた。大掾はその後工夫に工夫を積んでみたが、やっと七十二歳の春になって、初めて師匠春太夫のそれに比べて、余り聴き劣りのしない語り口に達することが出来た。

「つまり稽古だな、稽古より外には何も無い。」

と言って、大掾はその昔春太夫がしたような笑い方を繰り返した。

だが、実際は稽古ばかりではない、稽古の外に「世間」というものを知らなければならない。越路も九つ目が立派に語れる

ようになったのは、大分「世間」が分かって来た証拠だ。お蔭で皮肉な客には喜ばれるか知らないが、この道楽者ももう恋女は出来ないものと腹を決めなければならぬ。

〔完本 茶話〕谷沢永一・浦西和彦編 昭和五十八 一八九三年 富山房

難曲中の難曲とされる「山科閑居」だけに奥が深い。最後の段落は削除しようかと思ったが、ここがないと「茶話」にはならないので残した。道楽も「芸の肥やし」だった時代の話である。

#### (四) その芸風

近代はレコード録音が可能になった時代で、何人もの太夫と三味線弾きが音盤を残している。だが、残念なことに越路太夫はそれを嫌ったため、今、音声を耳にすることは叶わない。残された同時代の資料から、芸風的一端に触れてみる。

芸風については諸書に散見されるが、『芸談かたつむり』が最も詳細なので、そこから一部を引用する。

越路師匠の声の遣い方、それは鼻へ抜く音の遣い方のうまさ  
で、それがなんともいえませんでした。

師匠の「矢声」の音力なのですが、(略)「太功記」十段目を

語っておられまして、(略)「光秀ッ」と突っ張られる音力があまりに強いので「光秀ッ」の音力がビューンと、まるで手榴弾の弾風のように聞いている耳もとへ強い圧力で突き刺すように響いてくる(以下略)。

いうにいわれぬ情味のある美声ではないが所謂好いたらしい声でした。例えば「岡崎」で申しますと「剣術無双の政右衛門」のその「政右衛門」の音づかいなど、まことにいうにいえぬ情味が含まれておりまして、この一言でホロリと涙がこぼれてまいりましたものです。「妹背山」の定高でも「推量いたして……」とスカしていわれる音遣いの情味には、これも思わずホロリとさせられました。

音量に恵まれ、磨いた技術を駆使して語り、義太夫節に不可欠の情味をみごとに表現していたことが読み取れる。

美声家で艶物が得意だった攝津大掾とは明らかに異なる芸風だった。

また綱太夫は、越路太夫が彦六座系の竹本組太夫の許へも稽古に通っていたことを美談として伝えている。

## (五) その芸評

文楽の公演評は雑誌や新聞に多く残されている。すべてを紹介す

ることはできないが、主だったものをいくつか引用する。明治年間では、『演芸画報』四十五(一九二二)年八号に掲載されている香川蓬洲筆「文楽座の浄瑠璃」中、『岸姫松轡鑑』の評が詳細だが、近年は上演が稀なのでここでは省略する。

文楽座の越路太夫一座は、大正五(一九一六)年から八年まで、東京歌舞伎座で毎年十二月に十日間(八年は日延べして十一日間)の素浄瑠璃公演を行った。演目は毎日替りで、詳細は『歌舞伎座百年史 資料編』(平成七)一九九五年 監修兼発行人・永山武臣(編集人・金森和子 発行所・松竹株式会社/株式会社歌舞伎座)に記録されている。この時の評が『新演芸』に残されている。越路太夫に関するところを抜粋する。

大正五(一九一六)年の評は翌年一月号に「越路一座を聴く」と題して掲載された。筆者は清見陸郎。

大切越路太夫(絃吉兵衛、連引歌助)の「堀川」は折紙付の名品と見做されているものがある。その名品がそれ程に深い感銘を私の胸に与えなかった事を思うと、私はいろいろな疑義に迷わされずにはいられなくなる。

「女肌には白無垢や」の唄はいい。呂昇が唄うように魂も蕩けるような美しさはないけれど、盲目の老女と物心もつかぬ小娘とが一しよに唄うのとしては、この方が却って誠らしく、哀れも深い。但し、小娘の詞は余りにも太くがさつで越路の声も案



外欠点の多い声だという事を思わせられる。老母も今一息病苦にやつれた痛々しさを見せて貰いたかった。(略)

その代り与次郎となると、越路はさすがに他の追隨を許さぬ妙味を見せる。臆病で、そそっかし屋で、愛嬌者のこの猿廻しは、ともすれば当込みたくさんの騒々しいものになりたがるのだが、越路はよくそれから脱却し、要所々々では充分の憂いをきかせてくれた。おしゅんの手紙を伝兵衛の鼻先に差し付けながら言句に詰り、やつとの事に「祐筆じゃわい」というあたりなど軽妙を極めていた。猿廻しの条も、「お猿はめでたやめでたやなあ」が少し荒っぽすぎはしないかと思つた位のもので、大変よかつた。

山城少掾以前の「堀川」でも、与次郎の語りには変化があつたことがわかつて興味深い。

次は大正六(一九一七)年で翌年一月号の「越路太夫来る」。書いてるのは岡鬼太郎だが、具体性に乏しい評なので、ここでは割愛する。

大正七(一九一八)年の評は翌年一月号の「越路太夫一座」で、筆者は雙角。

越路太夫、吉兵衛の「紙治内」、まず太夫の巧くなつたのに

驚いた。(略)

世話物不得意の太夫が、紙治を語って軽くなった。情を語りうるようになった。尼ヶ崎の堂々たる特色から、平穩な味の方へ、頭腦をまず振向けたのであろう。技量もそれに伴つてきたのであろう。見台を叩かぬ料簡が、即ちあらゆる方面への進歩となつたに違いない。越路は覺醒した。(略)

素淨瑠璃であるに、手紙や箆筒の件に入れ事の多きは嫌味、こんな事ついでに覺醒してもらいたい。(略)  
殺しの件は、前年とは比べ物にならぬ程巧い。腹が出来たのである。

節の半分しか詞の言えなかつた太夫はまだ治兵衛やおさんに破綻を見せている。来年を楽しみにする。

世話物にも成長があることを窺わせる評文だ。

大正八(一九一九)年の評は翌年一月の「越路の岡崎の晩」で、署名は「おに」(岡鬼太郎)。今度は具体的である。

越路太夫の「岡崎」は、お谷の出が第一の出来。雪降る夜半の寒さ淋しさは、少しでも巧い太夫はさすがに誰も語り現すが、サアここだと開き直るせいで、大抵物々しく重くなるのが通例であるのに、この太夫のは、ションボリとただ淋しく、当て気なくお谷を門口まで引き出した処に妙がある。この一点だけで

も売物にする値打がある。

人物としては幸兵衛が第一の上出来で、これ一つ離れている。お谷は今少し印象が明瞭<sup>はつきり</sup>ありたい。「お前に逢うたは人參熊鷹」のあたり、門口での大性根場が引立たぬはまだ若い処がある。五六年の後にその味を望むとしよう。

婆は普通であるが、「引き出す糸車」の件に、外の淋味を助ける効のないが物足らぬ。家の中のこの件は、外の事件の背景である事に、十分の注意を払って貰いたい。全段を通じては、婆と政右衛門と二人限りの、かの苺切りのあたりが最上の出来であった。

肝腎の政右衛門は、気の毒ながら一番の不出来である。初中後とも上っ調子で、大武芸者の佛などは想見されぬ。極端な事を言えば、重太郎じみても聞こえ、赤垣臭いとも言える。いや、言い草が少し乱暴で、ご虫眞のお氣に障るかも知れぬが、真実の処、いかにも好くない。武士の真髓を解し得ぬ上方役者の類としては、或いはこれで通りもしようが、われ等の耳には得心がいかぬ。鴈治郎の政右衛門の浮ついたのなどが、大分影響しているのではあるまいか。

全段に亘って、政右衛門の改造と、情味の補給とをお願い申すが、それにしても、この岡崎が越路の立派な出し物である事だけは、又更に断言するを憚らぬ。面白かった。

吉兵衛の絃は、例の穏やかな中に、自らなる味が出て来た。結構である。

「重太郎」や「赤垣」と比較しているのは、外伝や新作物との違いを言い立てているのだろうか。初代中村鴈治郎の政右衛門は写真で見ると大立派だが、東京人の鬼太郎には色気や愛嬌が滲んで見えたくも知れない。

なお、八年の分を除く評文が『義太夫年表 大正篇』に摘録されている。

このように、『義太夫年表 大正篇』には、興行記録だけでなく、当時の公演評が併載されている。本拠地・文楽座の評で引用されているのは他に『浪花名物 浄瑠璃雑誌』『演芸画報』『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』である。この中からも越路太夫に関する記事を見つけ出すことが出来る。まずは時代物の名作に絞って紹介する。

大正元（一九一〇）年十月と同三年九月に「合邦」の評がある。より詳細な記述となっている後者から『浄瑠璃雑誌』の評を引く。

「深たる」より触（サワリ）迄の合邦は何となく重い感がする。「顔と顔とは隔たれど」受けて拍手「跡を慕うて徒はだし」ワーと受ける「助けておかしやる程」ここの腹は何とも言えぬ味ありてよし「助けたいばかりに花の盛りを捨てさせて」楽に語って然も出来ている。

「自らゆえに難病に」憂いを含みてここの情を語るはさすがに偉い「苦しみたもうと思うほどこいやす恋の」と一口に語りアツと言わせる「術なかる苦しかる苦しかる」拍手「憎い……苦じゃ」前は受けるが、憎いで切って息を継ぐから苦じゃが嘘になる、

切らずとも息さえ詰んでいれば上へ持って行くも手負いの情は失わぬ「おいやいおいやい」あっさりとよく応え、大喝采に終る。

芸評もだが、客席の反応も手に取るようにわかって面白い。素人義太夫全盛の時代、今と違って、演奏中も観客は大いに反応していた。

「すしや(鮎屋)」の芸評が、大正二(一九一三)年二月と四年三月、八年三月に見える。八年の毎日新聞の評を引く。

相変わらず旨いものだった。お里と弥助との色模様と言い、権太と母の情合と言い、さっと塗ぬってゆくうちに言い知れぬ深い味が籠かこっていた。奥へゆくに従い、段々芸の底力が出て来て、ぐんぐんと聴衆の興味を筋の深みへ引きずり込んでゆく呼吸は巧いものである。色々な人物にそれぞれの生命を吹き込んで、それを最後の段切までつかんで離さないところにこの太夫の偉さがある。

「寺子屋」も大正三(一九一四)年二月と五年一月の評が残っている。後者の毎日新聞評を引く。

さすがに立派なもので、大家の貫目を覗うには十分な出来で

あった。「気弱うては仕損ぜん、鬼になつて」の辺に鋭く出した源蔵夫婦の心が、「忍びの鰐元くつろげて虚と言わば切り付けん……」の條で松王の心と強く入り乱れ、最後に松王夫婦の心に圧倒されて瞠然として目をみはる当りの呼吸は掌面たなごころを指すように鮮やかに語り出された。

其日庵も認めた「寺子屋」である。

大正三(一九一四)年三月は大曲「山科閑居」を毎日新聞から。

初段として近頃はない聴き物でこの難場を十分語りこなしたにつけて越路が芸の円熟を思わしめる。浄瑠璃そのものから言っても、日本人の肉体から言っても越路の今日この頃の芸は、最も油の乗り切った所ではなからうか。お右ととなせの詰開きは、つっこんで語ろうとする故か、二人共がどうかすると男子の呼吸になりたがったが、あすこはもっとどここまでも女の思い詰めた気持ちが出してほしかった。

大正四(一九一五)年一月の「尼ヶ崎」も毎日新聞から。

残る蕾の花一つ、水揚げかねたような重次郎と初菊との情愛は叙事詩の冒頭にふさわしい沈着と静かな華やかさを以て巧に語り出されたが、最も巧いと思ったのは「入る月や洩る片庇」

で道具を上手に引っ張り、「心は矢竹藪垣」のでまた夫を後へ戻す間を腹を崩さずじっと力を沈黙の底に持ち堪える事で、「現れ出たる」光秀の強みを突発的でなく予備的にその沈黙の間孕んでいたのは流石に熟練の旨味と言わねばならぬ。

大正四（一九一五）年六月の「日向島」は朝日新聞から。

松門深く閉じてはの謡がかりから調子をかえて春や昔と運んで行く曲節の抑揚と呼吸の深さ。いよいよ景清の出になりやがて霊牌に向かつての述懐に移るまでの莊重さは無類の出来と云っていい。述懐になってから鋭く鋭く突っ込んで行く調子、張り切った咽喉を溢れて腸を絞るような声、一人舞台の景清と相まって近頃にはない緊縮した舞台であった。

越路太夫は世話物よりも時代物が得意だった。豊竹山城少掾は「だいたい時代物が得意でしたが、世話物でも『酒屋』とか『堀川』といったものはまた、格別よろしゅうございました。当て込みのない語り口でしたが、さびた、なんともいえない粋な声で、三味線を離れた音遣いをされました。いったい音遣いのうまい人で、私も、ちょっと耳に留めて勉強しておりました」と語り残している（『山城少掾聞書』）。

次に世話物を挙げる。山城少掾が越路太夫の得意演目に挙げた

「酒屋」の評が大正二（一九一三）年十月と六年五月に出ている。いずれも好評だが、六年の毎日新聞評を引く。

半兵衛と宗岸を両主人公にしたような取扱いで、その点からみれば申し分のない「酒屋」であった。我強い半兵衛の際立つた癖はかなりよく出ていたが、宗岸の「婿の半七は人殺し、お尋ね者になったわいの」を一気に語り続けるのは考え物で、いつぞや春子（太夫）のを聞いたように「人殺し」で少し間を置いて沈黙の味をきかせ、さて「お尋ねもの……」と続けた方が面白いと思う。お園のサワリは期待した程ではなかったが、手紙の条の「こりゃまあ真実かいなあ半七様……」には実感の響がよく出ていた。

因みに、同じ公演の朝日新聞評はお園を誉めている。

余談だが、この時のお園は初代吉田栄三で、毎日は「動きすぎてとんと味に乏しかった」、朝日は「あまりに華やかすぎて寂しいこの場にそぐわないのが邪魔になった」と記している。

「渋い」という印象（想像）のある栄三の、しかもお園の評は興味深い。

次の二つは越路太夫の業績の一つである古狂言の復活に関わる演目である。越路太夫は大正三（二八一四）年、院本研究会を設立。この年一月に近松門左衛門作『寿の門松』、同六年三月に同じく『心中天の網島』を原作通りに上演した。

『寿の門松』は『浄瑠璃雜誌』の評文から。

越路は日に十二遍宛稽古し苦心した甲斐空しからず。淨閑の町人堅氣、治部右衛門の侍氣性遺憾なく描き出し、将棋の述語を以て、与次兵衛の罪を贖え、金は出さぬと相方争う舅と親の義理人情の深刻なる文章を能く活動させ、後段に至り淨閑が鼠落しを以て鼠に譬え与次兵衛に落ちよと論す所などは子を思う親の情溢れ、同情万斛の涕をそそがしめた。お菊吾妻の人格の情味を語り分けて成功。

前の年、大正二（一九一三）年に師匠である攝津大掾が引退し、紋下として番付に名前は残していたものの、文楽座の命運は越路太夫の双肩に移行しつつあった。そんな中での研鑽ぶりが窺える。

続いて大正六（一九一七）三月の「紙屋内から大和屋の段」の評の一部を朝日新聞から引く。

弟を氣遣う孫右衛門も戸の外で小春を待つ治兵衛から「火の用心」まで好かったが、ここではそれらの人物よりも最も大切なこの場合全体に蟠ったうす暗い悲しい台詞を第一に活かしているのは賞讃しなければならない。

小春を迎えに来てお泊りじゃと断られて帰ってしまった駕の衆が先刻潜戸をがらがら音させた後は音も絶え人の氣も絶

え、暫く空の舞台のみが不安を続けている中に「光も細く更なる夜の……」と越路の床と吉兵衛の美しい三味の音もつれ合っ  
てしんみりと聞こえていたことなど今も耳に残っている。

この時の評は『新演芸』五月号にも美野一白（中井浩水）「文楽座の『天網島』」が載っている。こちらは令和元（二〇一九）年九月刊行の国立劇場上演資料集（六四二）に再録されているので、それに譲る。

「大和屋の段」はその後、八世竹本綱太夫に伝承され、今日も近松原作の形で上演が続いている（『芸談かたつむり』）。

越路太夫の芸評を読むと、ぜひ聴いてみたかったという思いはつのるばかりだが、芸は今も継承されている。

そして、越路太夫の遺品には、新聞記事がきちんと張り込まれたスクラップブックがあった（『目録』一書籍のうち、新聞抜粋帖129）  
そちらでは大毎、大朝以外の大阪日日、大阪時事、大阪、大阪新報、大阪朝報、大阪絵入、関西日報、など、現在では閲覧が難しい新聞記事も保管されている。精査できればさらに情報が収集できるはずだ。こちらも後日を期したい。

## （七）その芸談

越路太夫の芸談は『義太夫大鑑』下巻に収載されている「竹本越路太夫の芸談」がまとまったものとして知られている。厳しい稽古

を受けた子ども時代の想い出や、世話物の難しさなどを語っていて貴重だが、今はWEB上に公開されているので、そちらに譲る。それ以外は管見の限りにおいて、あまり残っていない。現在、把握しているものを紹介する。

一つは『新演芸』大正五（一九一六）年七月号掲載の「越路太夫の先代萩」（香川蓬洲）。八頁に及ぶ文章だが要領を得ない内容で、長い前口上があった後に越路太夫に直接聞いた話がようやく出て来るのだが、どこが本人の談話なのかわかりにくく、ここでは引用しない。この段階では地方公演を除いて本公演では語ったことがないせいもあるのだろう。越路太夫は二年後の七年二月、文楽座で「御殿」を語っている。

もう一つは『演芸画報』大正六（一九一七）年六月号の「関西楽屋巡礼」（SSS）に収録されている「鮎屋と越路太夫」。文楽座の楽屋を訪ねた記者の質問に越路太夫が答えている。

一体この鮎屋のような語り物は、どっちゃかというたら、私の声には適いません。私の声としては、権太や景時などは楽ですが、楽やというて旨く行くものでもなし、声に適わんかて、一通りの節が附いてござりますから、どんなものでもやれん事はござりませんが、一番力を入れて語るところは、弥左衛門が帰って来て、弥助を上座に直して「君の親御、小松の内府……」という物語になるとござりましょう。それから権太では首の入った鮎桶を抱えて「邪魔ひろぐなとすがるを蹴倒し」て

駆け出して行く前後からでござります。太夫の方が語り場所にいろいろ苦心いたします上に、人形遣いの方にも仲々苦心がありまして、例えば権太の着付なぞでも、今度は上方でいう「どんざ」という襦袍のようなものが着せてありますが、昔は又権太の風体がころっと変っておりました。先々代の玉蔵さんというのが工夫をして、茶無地の着物の裏を、所々剥がして綿をつけて着せ、帯の代わりに子供の淡紅色とよきの附紐を取って結んだつもりにしておりました。これはおしまいの権太が腹を突かれてから懺悔のところになって「わしと善太をこれこうと、手を廻すれば倅めも……」で愁嘆になり「かけてもかけても手がはずれ、結んだ縄もしゃらほどけ」で、その帯に附いている子供の巾着を振る科にはまって行くようになっておりました。（以下略）

文中の玉蔵は初代吉田玉造である。

### （八）その人柄

越路太夫の人柄を伝えるエピソードはいくつか残っている。先に引いた『山城少掾聞書』には芸風だけでなく、世に知られた「勘当」の逸話も載っている。

越路さんが若い時から三十なんべん、大掾師匠から勘当され

たというのは有名な、嘘のような本当の話で、それも不身持が因だっただけが多いのですが、ひとがいいだけに絆はなされやすかったんでしょう。まったく世間放れした、毒のない、芸いっぽうのお人でした。大掾師匠も、なんども勘当したりなさったものの、芸は認めていられ、ひとのいいのをやっぱり可愛がっていられたんだと思います。

山城少掾が越路太夫を崇拜していたことは、その弟子である八世竹本綱太夫が語り残している。

私の師匠は若い時分から、非常に越路師匠を崇拜されていました。及ばずながらも、文楽の太夫となった以上、三代目の越路太夫ほどの名人になりたい。いわば越路師匠を自分の将来の目標とされていたのではありますまいか。(略)私達弟子どもをつかまえても、よく「如何なる場合でも、越路師匠の芸だけは絶対に聞いておかねばならない。どんな語りものでも聞きのがさぬように…」と訓えられておりました(芸談かたつむり)。

綱太夫は若いころに越路太夫に叱られた思い出もこのあとに語っており、素顔は奔放でも芸には厳格だったことがわかる。

ただし、芸人を抱えるお仕打ち側から見れば、扱にくいところもあったようだ。後年の昭和十五(一九四〇)年だが、松竹の白井松次郎が『演芸画報』八月号に思い出を述べている。

もう立派な紋下に据わってからのことですが、私との交渉に、どうも世間へは通らない、非常識なことを言って困らすものだから、私は遂に「あんたとの話は見台を真中に置いて話をしましょう」とこう言ったことがありました。(略)社会人としての越路は全く零で、見台を前にした芸術家としてのみ越路太夫は一人前だという意味であったのです。私は「浄瑠璃を語れば義理人情を彼のように生き生きと語りこなして、あらゆる人間の事に通じている人が、袴を脱ぐとさっぱり駄目だ」とも言いました。それほど越路太夫は芸のことに凝り固まった人でした。

白井は興行師としての苦勞を語りながら、越路太夫の芸を十二分に評価しているのである。越路太夫もまた、ひとりの「芸阿呆」であった。

その太夫人生を支えたのが、たま夫人だった。たま女のこと目録の解説書に記し、南木芳太郎が主宰した「京阪神名流 上方舞大会」へ出演したこともこれまでに紹介してきたので、ここでは繰り返さない。

### むすび

三世竹本越路太夫は知れば知るほど人間の魅力にあふれた人だ。芸熱心で、太夫として優れていたのは言うまでもなく、普段から明

朗、快活で、人当たりがよく、誰からも愛される存在だったことが、今回、資料類を通してさらによくわかった。

新聞や雑誌類は調査を続ければ新たな情報が出て来る可能性がある。試みに手許にある二代目實川延若の後援会誌『やぐら』三冊を見てみたら、越路太夫に関する記事が複数あった。同誌は、大正時代に流行した役者の後援雑誌の中では、例外的に最頁の役者のことだけでなく、同時代の劇界の情報がかかる記事が掲載されている。編集していたのは高谷伸で、池田文庫が多くを所蔵している。紙幅の都合で今回は触れないが、今後も資料を追加して、少しでもその全容に迫っていききたい。